



神苑の決意

主張

二・四名護市長選挙を振り返る―蔡温と波平恵教の対薩摩認識を視点として―

本号の内容

【主張】二・四名護市長選挙を振り返る―蔡温と波平恵教の対薩摩認識を視点として―（木川智）：1／【解説】二月七日「北方領土の日」を「北方の日」に―戦後外交の見直しと日口新外交の展開を―（高井七海）：4／【連載】アジア放浪記―歴史を掘り起こし日本を見る台湾編①（仲村之菊）：6／活動報告：8／【談話室】一枚のピラに思うこと（西山徹）：19／花瑛塾日誌・編集後記：20

1部 1000円
（別途送料160円）

慶長一四年（一六〇九）三月、薩摩藩（島津氏）は琉球王国へ三〇〇〇名ともいわれる部隊を派遣し、奄美大島などを降しつつ沖縄本島に上陸した。

琉球には「ヒキ」といわれる防衛組織があり、決して無防備ではなかったが、戦国時代を生き抜き、最新鋭の銃火器で武装した薩兵に互角に渡り合える防衛体制は存在しなかった。さらに薩摩は商人などから琉球に関する情報収集を徹底し、軍事行動のシミュレーションを展開していたが、琉球側にもそのような行動はなく、あっさりと首里城は占拠され、

尚寧王は薩摩へと連行された。

こうした薩摩の琉球侵略により、琉球王国の版図であった奄美大島や徳之島などが薩摩の直轄地とされ、琉球王国の歳入は大幅に減少した。さらに薩摩への貢納が義務づけられ、中国をはじめとした対外貿易にも大きな制限が課せられた。

貿易システムの变化による盛衰はあるにせよ、琉球王国は中継貿易国家として繁栄していたが、こうした薩摩の侵略により経済的な大打撃を受け、特に内国植民地的状況にあった宮古・八重山などの離島は、「間切崩れ」と

「神苑の決意」 主筆 木川智

いわれる地域全体の崩壊が発生していった。事実、琉球王国の大宰相・向象賢は「大和之御手内二成以後四五拾年以來、如何様御座候而國中衰微候哉」（「口上覚」）云々と、その窮乏を記している。

蔡温と波平恵教の対薩摩認識

琉球王国に打撃を与えた薩摩に対する怨嗟は凄まじいものがあつたと想像されるが、向象賢の次代の改革者・蔡温は、薩摩への感謝を述べる不思議な言葉を残している。例えば、